

おじさんの話

小山清

青空文庫

昭和二十年の三月上旬に、B29が東京の下町を襲撃した際に、私は一人の年寄と連れ立つて逃げた。その年寄のことを、なが年私はおじさんと呼んでいる。おじさんはそのとき、折りわるく持病の神経痛が出て跛をひいていたので、私は手を引いて逃げたのである。二人ともに身一つで逃げた。おじさんはいちど私のことをいのちの恩人だと云つたことがあるが、そんなに感謝される謂はなにもない。

私達はともにある新聞販売店に勤めていて、そこの主任が出征し、その家族が疎開したあとの留守宅を守っていたのである。店員も皆んな戦争にとられて、店に寝泊りしているのはおじさんと

私のほかにはなく、配達は小学生が勤労奉仕でやつてくれてているような状態であった。そして私も店に寝泊りはしていたが、徵用されて軍需工場に通つている身の上であつた。

私が下谷の竜泉寺町にあつたその店に住み込んだのは、日華の戦争がはじまる少しまえのことであつた。そして私は若い店員たちの中に、一人雜つている年寄りのおじさんを見た。おじさんの主な役目は紙分けであつた。紙分けというのは、本社から輸送してきた新聞を、区域別に購読者の数に応じて分けることを云うのである。おじさんが分けてくれた新聞を、私たち配達はそれぞれ肩紐でしょい込んで、配達に出かけていくのであつた。

冬の朝などでも、おじさんは暗いうちから起き出して、通りに

面した窓際にある事務机の前に頑張っている。本社から廻つてくる輸送のトラックが店の前に横づけされるのを待機しているのである。ジャンパーの上に汚れた縕袍どてらふくらすずめを羽織つて、脹雀ふくらすずめのよう着ぶくれたその恰好には、乞食の親方のような貫禄がある。向う鉢巻で、机の上に頬杖をついて、こつくり、こつくりしていることもある。

どうかしておじさんが寝過ごしていると、トラックから、「竜泉寺、竜泉寺。」

と呼ぶのが聞える。おじさんは「おう。」というような寝呆け声を出して跳ね起き、それからパタン、パタンというゴム裏草履の音をさせて梯子段を下りていく。私たち配達はそれを夢うつつ

で聞きながら、またひとしきり眠りを貪るのである。紙分けの途中で、おじさんが梯子段の口に顔を出して、

「おう。諸君、紙が来たぞ。起きよ。起きよ。」

と声を掛ける。けれども、それで起きる奴などはいない。私達がそれでも一人、二人と不承不承のように起き出して配達に出かけていくのは、おじさんが紙分けをすまして、また自分の寝床にもぐり込む頃なのである。そして私達が配達から帰つてくる頃には、ひと眠りして起きたおじさんが、既に店の掃除をすましているのである。

私はその店にながく住みついたが、おじさんとはとりわけ親しくなつた。配達の出入りの多い中で、お互いが古顔であつた。親

と子ほどに年がちがう。私は元来人づきの悪い、頑な性分で、すぐ人と気まずくなつてしまふのだが、おじさんとはそんなことがなかつた。私達はつまらないことで、よく^{いさかい}諍をしたものだが、そのために互いの気持にこだわりが出来るようなことはなかつた。ひとえに、おじさんの寛容な人柄のせいである。

おじさんは能登の七尾の人で、三十位のときに国を飛び出して東京へ来て、それ以来この職業に携わってきたのだという。明治十年の生れだと云うから、私達にとつては大先輩に当るわけである。またおじさんはかつて、小石川のどこやらの裏店に住んでいた、雌伏時代の菊池寛のもとに配達をしたことがあるそうである。おじさんの業界に尽瘁することも久しい。私は心中ひそかに、お

じさんのために、こんな墓誌銘をさえ考案しているのだが。

「ここに配達夫礼次郎の墓あり。潔白なる生涯のしるし、肩紐と地下足袋を彌る。」

礼次郎というのはおじさんの名前である。かつて総理大臣をした人に、おじさんと同じ名前の人気がいたように思う。いまなお饗鑠としているおじさんに対して、あらかじめ死後のこと懸念するというわけのものではない。

国にいたときおじさんはなにをしていたか、それはつい聞いていない。身の上話などはあまりしない人だが、いちどかつておおかみさんだった人のことを、「怪しからぬことがあつたから。」と云つたことがある。よくはわからぬが、国を飛び出したのも、そ

んなことが原因のようである。

私達が女の話をはじめても、それに加わるようなことはまずなかつた。おじさんと一緒に道を歩いていて、通りすがりの女のことを、私が、

「悪くないじゃないか。」

と云つたら、おじさんは顔を背けて、苦々しそうに唾を吐いた。
「おじさんはなかなか好男子だから、若いときはもてただろうなあ。」

と私達が冗談を云えば、

「おう、もてたもんだよ。」

と他意なく笑つた。

それでも、おじさんは、国を出てから三十年にもなるわけであつた。

おじさんは矍鑠としていた。病氣をして寝込むなんてことも殆どなかつた。それでも戦争の終る頃には、神経痛が出て歩行困難になり、よそめにもめつきり衰えが見えたこともあつたけれども、それは寄る年波のせいもあるうが、主として当時の栄養不足が原因であつたろう。気象もしつかりしていて、どうしてなかなか若い者に負けてはいなかつた。またおじさんには、おじさんのような境遇にある年寄が持つていそうな厭味が少しもなかつた。人に阿つたり、主人に取入つたりするようなところが少しもなかつた。おもね誰に対しても、一対一で向つていた。それだけに頑固で人に譲ら

ぬところがあつたけれども。そして、そういうおじさんの心意気はその風貌姿勢にあらわれていて、なんとなく飄々とした脱俗味ユウモアさえ感じられた。

おじさんと一緒に銭湯に行つたとき、冬のことであつたが、湯船の中でおじさんが、——はじめはこちらの体が冷えているから、まずぬるい方の湯に這入つて、あとであつの方の湯に這入ればいいという、そんな至極当たり前のことをもつともらしい顔をして講釈したとき、いつしょに湯に漬つていたいい年の男が、いかにも感に堪えたような顔をしておじさんを見て、

「あなたさまは、ひそかに世の中のために御心労なさつていられる、○○先生のような方ではないでしょうか。」

と云つた。○○先生というのはおそらく心学とか道学とかいうものの先生なのであらうが、そのときおじさんは、あたかもその○○先生であるかの如き顔をして澄ましていた。その男も一寸頭のおかしいような顔をしていたが、それにしてもおじさんには、そんなふうに買い被られるだけの人品はたしかにあつた。湯船の中ではみんな裸で、おじさんにしても新聞屋の記号マークのついたジャンパーなどは着込んでいないから、本来の値打が輝いていたのであろう。

おじさんの頭はもうだいぶ禿げ上つていたが、それでも鬚や後頭部にはまだ多少は毛が残つていた。鼻は高く大きくて、若いときは実際に好男子であつたに違ひない。背筋などもしゃんとして

いて、おじさんの気概のほどが見えた。

いちどおじさんが店の朋輩と、とつくみあいの喧嘩をしたのを見たことがある。将棋をさしていたのだが、思いがけず、腕力沙汰になつた。相手は店の者の中でも、氣の荒い乱暴な男であつたが、おじさんも屈せず応酬していた。すぐ留められたが、窓ガラスが毀れ、おじさんの額や唇から血が出た。見ていて、「元気だなあ。」という気がした。

朝刊の配達から帰つて、朝飯を食べると、私たち配達はまたひと眠りするが、おじさんは朝飯をすますと、なにやら一帳羅のような着物に着かえて、これもまた色の變つた中折帽を被り、手頸に小さな袋をぶらさげて、日本橋の蠣殻町の方へ出かけていく。

蟻殻町というところは株屋のあるところである。日曜祭日で株屋が休みの日か、雨降りの日以外は、一日も欠かさずに出かけていく。おじさんはべつに株屋の番頭をしているわけではない。これはおじさんにとっては道楽と云うべきか、これもまた商売と云うべきか、または病いと云うべきか、ともかく熱心なものであつた。病いならば、もはや膏肓に入る感じであつた。よくは知らないが、おじさんは行つた先で同好の士と、その日の株の上り下りにことよせて、御法度の賭けごとをするわけなのである。

おじさんはなにやらいいっぱい書き込みをしてある手擦れのした手帳や、色鉛筆で図表の引いてある、これもまたいい加減けば立つた方眼紙を持っていた。これはいわばおじさんの商売道具のよ

うなもので、おじさんが手頸にぶらさげて持参する袋の中の代物は、すなわちこれであつた。おじさんはときおり、老眼鏡や虫眼鏡をたよりにして、鉛筆をなめなめ、むずかしい顔つきをして、手帳や方眼紙を覗いていた。

「近頃はどうかね。儲かるかね。」

と訊くと、

「さつぱり儲からないよ。」

と苦にがそうに笑いながら云う。私はべつに賭博好きというわけではないが、それでも、おじさんの止められない気持は、察しのつかないことはない。

着物に着かえ、わずかに残つてゐる頭髪に湿りをくれて櫛でな

でつけ、几帳面に帽子を被つて出かけていくおじさんの姿は、いかにもいそいそとしていて、まるで堅気の勤人のように見えた。配達から帰ってきて、出かけるばかりのおじさんとぶつかり、「御出勤かね。」と云うと、おじさんは「うん。」とも云わずに、真面目くさつた顔つきをして、草履を突っかけて出ていく。往きはおじさんは徒步でいく。朝の新鮮な空氣のなかを、竜泉寺町から千束町に出て、浅草の観音さまの境内を抜けていくのである。これはおじさんの日課の散歩のようなものである。

「いい運動になるよ。体にいいんだよ。」

とおじさんは云う。おじさんが達者なのは、ひとつはこの毎朝の規則立った運動のせいであろう。かえりはおじさんも電車に乗

つてくる。その頃、ちょうど三の輪から水天宮行の電車が出ていたので、便利であつた。昼まえ、南千住の「浜の家」という弁当屋が私達の昼飯を届けてくれる頃には、おじさんは店に帰つてきていた。朝刊配達後眠りを貪つた私達も、その時分になると、ぼつぼつ起き出しあはじめるのである。

或る日のこと、おじさんがなかなか帰つて来なかつた。

「おや、おじさん、まだ帰つて来ないのかね？」

とふと誰やらが云い出して、はじめておじさんの帰りのおそいことに、皆んな気がついた。それでも夕刊までには帰つてくるだろうと思っていたが、時計の針は進んでも、おじさんはなかなか帰つて来なかつた。どうしたのだろうと、私達も訝り心配しあじ

めた。こんなことは初めてであつたし、ふだんおじさんは決してルーズな人ではなかつたから。

「まさか、おじさん、しょっぱんしたわけじやないだろうな。」

と私達は冗談を云つた。新聞屋仲間では、無断退店することをしょっぱんすると云い、またその当人のことは「パン吉」と呼んだ。新聞屋なみに卑下した用語である。しょっぱんする際には、誰にしろ、店に対しても多少の不義理をしていくわけであるから、その後めたさが自ずと語感にあらわれたわけであろう。この頃は、渡り者の配達で、しょっぱんの前科のない者は殆どいなかつた。だから私達は、誰かがまえの晩に廓へ遊びに出かけて、つい朝刊の配達に帰つてくるのがおくれたような場合でも、すぐ疑ぐつた

ものだ。けれども、おじさんはこの店に対してもよっぽんしなければならない因縁は、なにもなかつた。念のために、おじさんの行李が入れてある押入れを覗いてみたが、改めるまでもなく持ち出されてはいなかつた。おじさんの出勤先でか、若しくはその帰途かで、なにか事故が起きたのに違ひなかつた。

「自動車にでも轢かれたのではないからしら？」

私はそんなばかな心配をした。到頭、おじさんが帰らないうちに、夕刊のトラックの方が先に来てしまつた。私達が配達から戻つても、まだおじさんは帰つてきていなかつた。ようやく私達も一つの結論に落着いた。おじさんは出勤先での御法度の賭けごとが祟つて、その筋の御厄介になつたのに違ひないと。それでも私

達は、いまにもおじさんが間の悪そうな顔をして、ひよっこり帰つて来そうな気がした。その夜、私達はおじさんの帰りを空しく待ち明かした。

あくる日、店の主任はおじさんの出勤先へ出かけて行つたが、やがて帰つてきての話では、やはりおじさんはその処の警察署の御厄介になつてゐるのであつた。その日十人あまりの者が一網打尽にされたそうである。おじさんはそれでも二週間ばかり拘留された。警察側としては、一寸お灸をすえたわけなのだろう。おじさんの留守の間は、私が代つて紙分けをした。

「おじさん、いまごろ、どうしているだろうなあ。」

私達は店の板の間で、朝刊や夕刊をそろえながら、よくおじさ

んの噂話をした。同じ屋根の下に寝起きをし、同じ釜の飯を食つている者同士の親しみが誰の心にもあつた。

おじさんが釈放された日には、私が迎えに行つた。おじさんは元氣で、そんなに寝れても、汚れてもいなかつた。警察署を出でから、私達は水天宮の近くの蕎麦屋に寄つた。

「こここの蕎麦はうまいよ。おれはいつもここで食べるんだよ。」

とおじさんは云つた。おじさんは面白ながつて、もう店へは帰れないと思の弱いことを云つた。

「諸君に迷惑をかけた。」

「なにも気にすることはないさ。運が悪かつただけじゃないか。紙分けはやつぱりおじさんでないと駄目だ。」

朝刊の紙分けで、私はいちど大間違いをしてかして、朋輩から文句を云われた。

「おやじがしてくれていたのか。」

「いや、おれがやつていた。」

「それはすまなかつたね。」

おじさんは私にさきに帰つてくれ、自分は夕方帰る、昼間はどうもきまりが悪いからと、連れ立つて帰ることをしぶつたが、私はおじさんがひよつと弱氣を出して、このまま店へ帰らなくなるような不安な気もしたので、性急におじさんを連れて帰ろうとした。おじさんは一寸さっぱりしていくからと云つて、床屋に寄つた。私も一緒に這入つて、おじさんがひげを剃つてもらつてゐる

間を、所在なく待つていた。私はなんだか自分が、おじさんの附馬ででもあるかのような気がした。その店は小汚なく、古風な感じで、肩がこらなかつた。私は壁に貼つてあるポスターの中の、豊満な体をした支那美人に、うつかり見とれたりした。

水天宮の都電の停留場のところで電車を待つてゐる間に、おじさんは不意に、

「一寸そこまで行つてくるから。」

と云いすてて、私になにも云いかける隙を与えずに、足早にすぐ目の前にある水天宮の境内へ這入つていつた。流石におじさんの後を追うわけにもいかなかつた。それにおじさんがこのまま私を撒くとは思えなかつた。私はそこに佇んで、おじさんが戻つて

くるのを待つた。やがて電車を四、五台見送った時分に、おじさんは戻ってきた。その顔を見て、私は合点がいった。——おじさん、一寸覗いてきたな。おじさんのおなかのなかの勝負の虫は、もはや活潑に動きはじめて、おじさんは先刻から痺しびれをきらしていたのに違ひなかつた。

店に帰つてから、それでもおじさんは二、三日は神妙にしていた。店の間の羽目板に背をもたせて、生まあくびをしているおじさんの様子には、陸に上つた河童のような気の毒さがあつた。

「おじさん、だいぶ辛抱がつづくね。」

と云つたら、おじさんは苦笑いして、「人の悪いことを云うぜ。」と云うような目つきをした。辛抱はしていても、思いは遠く

水天宮の方へ行つてゐるようであつた。そのうちまたいつからともなく、おじさんの御出勤がはじまつた。おじさんの日常はまつたく旧にかえつた。店の方としては、警察の方がおじさんの身柄を拘束しない限りは、なにも不都合なことはなかつた。そしてその後しばらくは無事であつたが、ようやく戦争の旗色が悪くなつてきた頃に、或る日またおじさんは帰つて来なかつた。こんどは私が警察へ様子を見に行つた。刑事部屋へいつて、おじさんの名前を告げて、様子を訊くと、刑事はとぼけた顔をして、「知らんね。いるかも知れない。いないかも知れない。」と云つた。私が困惑して、

「年寄なんですが。」

となおも念を押して尋ねると、刑事は呑み込みの悪い男だなど云わんばかりの表情で私の顔を見て、

「だから、いるかも知れない、いないかも知ないと云つてゐるじゃないか。」

と云つて、暗示的な含み笑いをした。私もようやく、おじさんが無事にまた当處に御厄介になつていることを承知することが出来た。このときは、おじさんは二十九日間拘留された。こんどは誰も迎えに行かなかつたが、釈放された日に、おじさんは独りぶらりと店に帰ってきた。そしてやがてほとぼりがさめると、また相変らず、おじさんの御出勤がはじまつた。

店でのおじさんの仕事は、紙分けのほかには、毎日の仕事とし

ては、私たち配達が区域さきで勧誘してきた購読者の住所氏名を店の帳簿に記入することと、店の間の壁に貼つてある購読者拡張の統計表に、配達が勧誘してきた購読者の数を表にして書き込むことであつた。それをおじさんは毎日几帳面にやつていた。私達の勧誘の成績がいい日は、おじさんとしても張合があるようであつた。私達が勧誘の仕事から帰つてきて、店の間の事務机の前に陣取つているおじさんの目の前に、ジャンパーのポケットから、まるで札束でも取り出すようにして、購読者拡張用のカードを置くと、おじさんは上機嫌な顔をして、

「御苦労さん。有難う。」と威勢をつけて云うのが、きまりであつた。また、私達が勧誘の仕事を懶けたりしてか、または骨を折

つても一軒もお得意を獲得できなかつたりして、

「おじさん、きょうはノー・カードだよ。」

と云うと、おじさんも目に見えてしょんぼりした顔になつて、「そうですか。」と元気のない声で、丁寧な口をきいた。またときには、その日の勧誘が徒労に終つてがつかりして帰つてきた私達の目の前に、おじさんの方から、

「へえ、申込みだよ。」

と云つて、カードを出してくれることもあつた。それはお得意の方から、わざわざ店に購読の申込みにきたものであつた。私達の店では、申込みの分もその区域の配達の所得になり、自分が勧説したものと同じように、私達はカード料にありつけたのであつ

た。

おじさんの仕事はそのほかには、毎月区域別に新しい定数台帳を作製することと、領収証の綴込をやはり区域の数だけこしらえることであつた。おじさんは定数台帳を作製するのに新聞の折込広告を利用した。方々の商店や飲食店などから持ち込んでくる広告ビラの中から、それぞれその幾分かをとり除けて置いて、毎月の定数台帳の材料にした。これはどこの店でもやつてていることであつた。広告ビラというものは大抵大きさが一定している。その中の広告文の印刷してない、裏側の方が真白な紙をえらんで、裏側を表に二つ折りにしたやつを三拾枚なり四拾枚なりまとめて綴じると、定数台帳が一冊分出来るのである。おじさんは手先の

器用なたちで、観世縕りなども上手だつた。おじさんが観世縕りでしつかり綴じてくれた台帳に、私たち配達はめいめい区域のお得意の名前を書き込むのであつた。月のおしまい頃になると、おじさんのお手製になる翌月の新しい定数台帳が、もうすっかり完成して、店の間の羽目板に打ちつけてある釘の頭に、区域の号数順にぶらさげてある。月が変つて月はなお得意の数が落着くと、私達はその月の定数をきめ、そして台帳に記入するわけなのだが、つい億劫にしてそのままにして置くと、おじさんは店の黒板に、たとえば、

「四号、七号。定数台帳に記入して下さい。」

というように大書するのである。私達の店の区域は八つに分れ

ていて、一号から八号まであつたのだから、二人だけが記入していないわけである。この黒板の注意書きを見て、七号が記入したとすると、黒板の字は次のように変わる。

「四号。至急、定数台帳に記入すべし。」

実は四号と云うのは私が配達していた区域の名称であるから、いまなお台帳に記入しないでおじさんに世話を焼かせている人間は私ということになるのだが、私は横着な男だから、おじさんにこんな風な相談を持ちかける。

「ねえ、おじさん。すまないが書いてくれないか。」

いい年をして大の男が甘つたれた口つきをして云うのである。おじさんはそういう私の顔を見て、苦りきつた顔をする。

「駄目だねえ、君は。自分で書きねえ。書きねえ。」

私は甘つたれた人間の常として、おじさんの苦りきつた顔つきのなかにも、なお私に対する多分の好意が籠っているのを抜け目なく見てとつて、すかさずそこにつけ込むのである。

「そんなことを云わずに書いてくれよ。頼むよ。」

「なぜ自分で書かないんだ。」

「だつて、面倒くさいんだもの。」

チエツとおじさんは舌打ちをするが、もう半分以上私の頼みを容れる気になつている。

「しそうがねえな。出しねえ。出しねえ。」

とおじさんは云う。おじさんは、それに憮つて私に代つて台帳

に記入するところの原本を出しねえと云つてゐるのである。私は待つっていましたとばかり、先月の定数台帳をおじさんの目の前にひろげる。それのところどころには今月から新規に購読するようになつたお得意の名前が書き入れてあり、また先月まで購読をやめたお得意の名前の上には墨で棒が引いてある。

「この通りに写せばいいんだね。」

とおじさんは念を押して、さてやおらペンを取り上げて、私に代り記入してくれるのである。私はと云えば、年寄にそんな面倒くさい仕事を押しつけて置いて、その間を浅草公園へ出かけて、割引の映画を見たりして過ごした。私が浅草から帰つてくる頃には、店の間は電気も消えてしんとしている。私はくらがりの中で、

四号の定数台帳を釘からはずして、中を覗いてみる。くらがりの中でも、白いところに黒く書いてあるのはわかる。流石になんだかすまないような気になる。私は定数台帳をもとに戻して二階に上る。六畳と四畳半の間の襖をとりはらつたところに、屈強の男達が思い思いの向きに寝ている。まだ帰つて来ないのもいる。おじさんの寝床は梯子段の下り口に一番近いところにある。おじさんはもう白河夜船である。私はおじさんの隣りの自分の寝床に這入つて、買つてきた塩豆を齧りながら、知合の本屋から借りてきた探偵小説を読む。五、六頁も読むと眠くなつてきて、そこで私も眠るのである。

私は領収証も、よくおじさんに書いてもらつた。もつともこの

方は私ばかりではなく、ほかにもそうしてもらつてゐる不精者や横着者がいた。ひとつはおじさんが自分から進んで証券書きを引き受けてくれたから。証券の方は定数台帳と違つて、先に購読者の名前を記入してから綴込むのだつたから、記入の方がすまないと、いつまでも領収証をまとめることが出来ないわけであつた。そして領収証がまとまらないと、集金の方が自然おくれるわけであつた。おじさんは本社から夕刊を包装して送つてくる紙でカバーをつくつて、領収証を綴込んでいた。

おじさんはだいたい勝負事の好きなたちなのだろう。碁や将棋なども強かつた。店でおじさんの右に出るものはいなかつた。竜泉寺町の都電の停留場の際にミルク・ホールがあつて、そこの親

爺が将棋好きなところから、そこには将棋の盤がいくつか置いてあつて、近所の閑人たちが寄つてきては勝負をあらそつていた。おじさんも一時通つていた。けれども、それも一時のことであつた。おじさんは大抵夜は早く寝てしまつた。私達はみんな夜更しの習慣がついていたが、おじさんだけは、ひとつは朝早く起きなければならぬせいもあるが、八時ごろにはひとりさつさと寝てしまつた。おじさんは煙草はまるでやらず、酒はすこしは呑んだが、それもなにかの折りに店の者たちと一緒に呑むだけで、自分から呑み屋へ出かけて行つて、ほろ酔い機嫌で帰つてくるというようなことなどはなかつた。それでも、おじさんの酒はいい酒で、呑むとすぐいい機嫌になつて、それこそ酔つた泥鰌のように

ぐんにやりして、眠つてしまつた。浅草へ出かけて行つて、映画を見たり浪花節をきいてきたりすることもなかつた。むかし蔵前のA新聞の店にいたときは、近くに浪花節の常設の小屋があつて、常住そこから折込広告を持ち込んできて無料入場券などもよく手に入つたので、その頃は毎晩のように浪花節をききにいつたものだとおじさんは云つた。云うまでもなく、おじさんはもう女遊びをするという年ではなかつた。おじさんの楽しみと云えば、やはり蠣殻町へ通うことであつたろう。

あるとき店へ中年の堅気な感じの男の人がおじさんを尋ねてきた。おじさんは着物を着かえてその人と連れ立つて出て行つた。おじさんを尋ねて誰かが来たことは、それが最初であり、また最

後であつた。その人がどういう人か、またどんな用件でおじさんを尋ねてきたのか、私達もべつに詮索しなかつたし、またおじさんも帰つてきてからどんな話もしなかつたが、おじさんの郷里の人だということだけが私達にもわかつた。そのことがあつてからしばらくしてから、二年ばかり経つてからだつたが、戦争もはげしくなつてきて店の者も殆ど戦争にとられて店の様子も寂しくなつた頃であつたが、あるときふとおじさんが、いつも胴巻に挟んでいる大きな蝦蟇口から、一葉の写真をとりだして私に示した。それは若い、三十前後の女の人の写真であつた。

「おれの娘だよ。」

とおじさんは云つた。そしておじさんは話した。いつぞや男の

人が尋ねてきたとき、娘に会つたのだと。おじさんが国を飛び出したときは、娘さんはまだ母親のはらのなかにいた。娘さんも既に片附いて人妻であるが、三十年も昔の父親に、まだ見たこともない父親に会いにきたのである。してみると、娘さんはその生き立ちの途上で、生れ出る前に自分を捨てた父親のほかには、父親を求めることが出来なかつたものと見える。同郷のかつてのおじさんの知合の男が東京見物をするのに伴ってきたのか、それとも、わざわざおじさんに会わせるために、その男が娘さんに附添つてきたのか。やはりなにかことのついでがあつたのだろう。それでもおじさんも娘さんも、三十年ぶりに親子の対面をしたわけである。

「靖国神社へ行つたよ。」とおじさんは云つた。

「二拾円呉れてやつた。けちな真似もできないからね。奮発したよ。」

とおじさんは云つた。

写真はそのとき娘さんがおじさんに渡したものであろう。

戦争がはげしくなるにつれて、前述のように店員は戦争にとら
れていなくなり、私も軍需工場に徴用された。それでも私の徴用
先はつい近くの三河島にあつたので、私は店に寝泊りして通うこ
とができた。その頃新聞の方も専売から合配に変つていて、配達
は近くの小学校の生徒たちが交代でやつてくれていた。そのなか
には、私の馴染みのお得意の息子たちもいた。おじさんは相變ら

ず紙分けをやり、世話の焼ける少年配達夫の面倒を見ていた。ある日、工場から帰ってきた私に、おじさんがにやにや笑いながら云つた。

「近いうちにいいことがあるよ。」

「いいことって、おれにかい？」

「うん。」

「なんのことだい？」

「思い当ることはないのか。」

「思い当ることなんかあるものか。」

「おめでたい話だよ。」

「へえ？」

私にはどうも合点がいかなかった。けげんそうにしている私に、おじさんはわけを話してくれた。その日、興信所の調査員が来て、私のことをいろいろおじさんから聴取していったというのであつた。

「心配することはいりません。おめでたい話です。」

と調査員は云つたといふ。興信所の話でおめでたいと云えば、さしづめ縁談だろう。けれども私にはさっぱり思い当ることなどはなかつた。一体どこの誰が、そんなおめでたい話で、私の身許調査などをする気になつたのだろう。若しもそれが本当だとすれば、それこそ降つて湧いたような話だ。それにしても、興信所の調査員がやつて來たことだけは事実である。おじさんはまじめく

さつた顔をして私を見て、

「おれはこう考えるんだがね。きみがもと配達していた区域に娘はいないか？」

「娘なんか幾人もいるさ。」

「いや、一人あればいいんだよ。その娘がきみのことを見染めたんだ。」

おじさんの話によれば、こうであつた。——私がもと配達して
いた区域のある家庭で、そこのひとり娘がいつからともなく気が
欝いで、食事もすすまず、夜もろくろく眠らない。日ましに体は
細る一方。両親は心配して医者に見せたが、どこも悪いところは
ない、これは私の専門外だと云う。そこで母親がこつそり娘を問

い糺したところ、娘の云うことには、実は私はどうからあの配達さんのこと……。私は噴き出してしまつた。まるで落語に出てくる横町の隠居が与太郎をからかうような話だ。

「冗談を云つちやいけねえ。おじさんも人が悪いな。」

「冗談なもんか。ほかに考えようがないじやないか。娘が病人になつては両親としても抛つておけないから、そこで興信所に頼んできみの身許しらべということになつたんだ。」

そう云われると、若しかしたらそうかも知れないという気がして、私はかつて配達した区域の娘たちの顔を、あれこれと思い浮べてみた。角の煙草屋の娘かしら。それとも横町の豆腐屋だろうか。土手下に土蔵のある大きな門構えの家があつたが、あそこに

年頃の娘がいなかつたかしら。……私も阿呆な証拠には、自分がなんだか男のシンデレラにでもなつたような気がしてきた。

「どうだ。まんざら胸に覚えのない話でもないだろう。」

それは私だつてなにも木石というわけではないから、人知れず憎からず思つた娘の一人や二人はないわけではなかつたが、けれどもそれは私だけの話で、先方は御存知ない。私が首をかしげて半信半疑な顔をしていると、おじさんも思案顔をしていたが、

「いや、これは娘じやないかも知れぬ。親の方から出た話かも知れんぞ。」

「などと、どういうことになるんだ。」

「養子だよ。きみを養子に欲しいんだ。どつちにしろ悪くない話

だ。きみは見込まれたんだから。」

「新聞配達を見込むなんて、そんなもの好きな人がいるのかね。」

「そこが見込むということじやないか。」

「だけど養子なんて、あまり芳しくないな。むかしからよく小糠三合なんて云うじやないか。だいぶ値段を安く踏まれていてるぜ。」

「ばかを云つちやいけねえ。むかしから養子に行つた人には大人物がいるんだ。修身の教科書に名前の載つているような人には養子が多い。大石内蔵之助だつて、伊能忠敬だつて、みんな養子だ。つまり誰しも養子をするからには、大人物を養子にして、家運の隆盛をはかるんだ。生半可な人間は養子にしてもらえねえ。くさすのは養子になれなかつた奴のひがみだ。」

「ばかに養子のことを弁護するじゃないか。まさかおじさんは養子じゃないだろうな。」

「おれは養子になれなかつたくちだよ。」

「だけどおじさん、家運の隆盛はいいが、養家先が豆腐屋だつたりしたら、ひでえことになるぜ。豆腐屋の早起きは新聞屋どこじやないからな。それに冬だからつて懐手をしているわけにはいかねえ。越後の高田町でも、豆腐屋だけは両掌を出していりというじやないか。おれは生れつき皮膚が弱いから、冬場は水の中に掌を入れると、^{ひび}鱗がきれて困るんだ。」

「どうもきみは大人物にはなれないな。」

「ところでおじさん、調査員にはどう云つてくれたね。」

「心配しなくともいいよ。そこは日頃の誼しみがあるから、悪くは云わねえよ。うまく云つといたよ。松葉屋にお馴染がいるなんてことは伏せておいた。」

その夜私は寝床のなかに這入つても、なにやら胸騒ぎがして、なかなか寝つかれなかつた。親に見込まれたという話よりは、やはり娘に見染められたという話の方が身に染みた。自分がこうしてねつからうだつが上がらないのに、おめおめと生きながらえているのは一体なんのためだろうなどと、そんな日頃あまり考えつけないことを考えたりした。やはりなにかを待つていてるのだろう。なにかを待つていてるとすれば、そのなにかとはなんだろう。やはりそれはどこやらの内気な娘から、実はというその人の本心を一

言ききたいことではないかしらと思つたら、私はなんだか胸がいっぽいになつてきた。一体どこの娘だろう。そんないまどき流行らない恋煩いをしている娘というのは。

けれども、この話はそれつきりであつた。その後なんの音沙汰もなかつた。つまり破談ということになつたのだろう。シンデレラは心がけのいい娘であつた。だから奇蹟が実現したのだ。私は叩けばいくらでも埃の出る男である。おじさんはうまく云い繕つてくれたとしても、よそから這入つた情報が芳しくなかつたに違いない。私は当座は錢の三百文も落したような気がしたが、日が立つにつれて、なにやら後味の甘さだけが心に残つた。処も知らぬ、名も知らぬ、顔も知らない娘さんの方が、ふと私の心頭を

掠めることしぶしぶであった。凡そ掴みどころのない、頼りない、若しかしたらまるつきり迷妄であるかも知れない話。けれどもそれが淡いとも云えないほどの淡さで私の心に残つていて、一瞬私をして夢見心地にさせるのである。私はいまでもときどき、こんな阿呆なことを思つたりするのだ。親から云い含められて娘さんは思いをひるがえし、他家へ嫁いで子供までなし、いまは幸福な家庭を形づくつてもはや昔のことは忘れているが、それでもときたま、子供の襁褓を洗濯しながらふと憶い出したりする、あの配達さん、いまごろどうしているかしら。

食糧事情がひどくなるとともに、おじさんも私もやたらに腹をすかした。二人寄れば食物の話ばかりしていた。二人共に大食い

で口の賤しい方だつたから。云うまでもなく配給量だけでは足らないので、なんとか手蔓を求めては食物を手に入れて、その不足分を補つていた。あるとき私は何枚かの外食券が手に這入つたので、それを米屋へ持参して米と交換してもらつたのだが、その際米屋の人がなにを思い違いしたのか、その外食券の一ヶ月分ほどの分量の米を私に渡してよこした。米を量つてているのをそばで見ていたも、その間違つていることはわかつたのだが、私はしめたと思い、なに食わぬ顔で米をもらつて帰つてきた。私はその米を押入へ仕舞い込んで、毎日徴用先の会社から帰つてくると、少しずつ取り出して煮て食べていた。私は三度の食事は工場の食堂で食べていたのだ。私は押入のなかの米を、私が勤めに出かけてい

る留守の間に誰かが、と云つてもおじさんのほかには誰もいないのだから、つまりおじさんがこつそり取り出して食べはしまいかと思つて、随分心配した。どうせ天から授かつたような米なのだから、半分おじさんに分けてやろうかと思つたが、惜しくてとても出来なかつた。ある日、工場の外註先に用事があつて工場から外出したときに、その帰途店に立ち寄つたところ、店の間の事務机の前に腰かけていたおじさんが、思いがけない時刻にあらわれた私の姿を見て、周章てて奥へ引つ込んだ。へんに思つておじさんの後に続くと、おじさんは台所から二階へ通ずる梯子段を上つていつた。台所にある瓦斯焜炉がふと目についたが、それにはその上にたつたままでなにかが載せてあつた形跡が見える。私は

さてはと思い、おじさんの後を追つて二階へ上ると、おじさんはおじさん専用の半間の押入になにやら入れていそいで戸を閉めたところらしく、白ばつくれた間の悪い顔をして、

「よう、きょうはばかに帰りが早いじゃないか。」

と云つた。私はすぐ会社へ戻らなければならぬのだと云い、私達は一寸の間よそごとを話したが、おじさんが階下へ下りた隙に、押入を覗いてみたら、布団の上に焚きたての御飯の這入つた小鍋がちよこんと載つていた。私は癪にさわつて、食べてしまつてやろうかと思つたが、流石にそれも出来かねた。

空襲の夜、おじさんと私は三河島の省線のガード下まで逃げて、そこで大勢の避難民と一緒に夜を明した。夜が明けてから、三の

輪にある同業の店を尋ねた。やがておじさんはその店に身を置くことになり、私は郊外の三鷹町にある友人が疎開した後の家の留守番に這入り込んだ。私は三鷹から三河島の工場まで通つたが、それから空襲が頻繁になつて、几帳面には通つて来られなくなつた。おじさんは三の輪の店で一区域受持つて配達するようになつた。神経痛が出たときも、足を引きずつて配達していた。私はときどき、おじさんの許に泊り込んだ。あるときおじさんの相伴をして、ビールの券にありつくために、国民酒場の前の行列の中に這入つた。おじさんはビールを呑むわけではなく、そうして行列してビールの引換券を手に入れては売つて金にしていたのである。そういう行列の中には生ビール一杯呑むだけではおさまらなくて、

呑まない連中に頼み込んで並んでもらい、券を余分に手に入れようとしている呑み手がいたのである。私が行列に並んでいると、その男がそばに寄ってきてそつと耳うちをした。

「券をもらつたらおれに渡してくれよ。お父さんともう話がすんでいるんだから。」

そう云つてその男は、私の三人ばかり前の方に並んでいるおじさんの姿を頤でしゃくつてみせた。私をおじさんの息子のように思つたらしかつた。取引がすむと、おじさんはもう一ぺん行列に並ぶから、私に先へ店へ帰つて待つているように云つた。店で待つていると、やがておじさんは帰つてきて、私に最前の分前をくれた。

終戦になつてから私は工場をやめたときにもらつた退職金でしばらくは暮らした。そのうちそれもなくなつた。友人も疎開先から戻ってきて、留守番の必要もなくなつたので、私はふとその気になつて、北海道の炭坑へ行つた。私はおじさんにいとま乞いもしないで北海道へ行つてしまつた。その前に私はおじさんを騙すようなことをしていたので、つい行きにくく足が遠くなつていたのである。おじさんが持つていたビール二本を金に換えてやると云つて、持つて行つてそのまま猫ばばをきめ込んでしまつたのである。私は炭坑に二年いたが、私はそこで、おじさんはもう死んでしまつたろうと思つた。私が炭坑へ行く前には、おじさんはもうすっかり衰えて元気がなく、余命幾許もなく見え、その店の主

人などからも厄介視されていたのである。

私はまた東京に帰ってきた。ある日、三の輪の店へ行くと、主人はおじさんはもうだいぶ前に、一年以上も前に店を出て、いまはその消息はわからないと云つた。私はもうきつとおじさんは死んでしまつたのだろうと思つた。野垂れ死をしたかも知れないと思つた。

ある日、用事で駒込の方へ行き、とある外食券食堂に這入つたら、そこにおじさんがいた。思いがけなく、めぐり逢うことが出来たのである。私は神さまのお導きだと思つた。おじさんは元気であつた。私は自分に後めたいことがあるものだから、不吉なことばかり想像したのだろう。おじさんはこの近くのある大工さん

の家に同居していると云つた。話をきくと、おじさんは相変らず昔のように、毎日ひるは蠣殻町へ出かけているのであつた。暮らしの方は外食券の売買とモク拾いでどうにかやつてゐるようであつた。この食堂の客は殆どが日傭労務者のようで、ここがおじさんの商売の場所であつた。私がおじさんと話している間にも、おじさんから外食券と煙草を分けてもらう者が何人かいだ。

それからまた、私はとき折りおじさんに逢いに行つた。晩飯時にその食堂へ行けば、おじさんに逢うことが出来た。時間が少し早いときはおじさんの同居先を尋ねて、連れ立つて食堂へ行つた。おじさんを同居させている大工さんがいるのが、他人の家に同居している境遇で、つまりおじさんは大工さんが借りてゐる六畳間

にいつしょにいるのであつた。大工さんは妻子のある人だから、大工さんもよくおじさんを置いているわけであつた。おじさんは大工さんに同居代を一ヶ月百円はらつて いる そ う で あ る。おじさんは朝五時頃に起きて、大工さんの家族がまだ寝ているうちに家を出て、すぐ食堂へ行く。そして朝飯を食い、傍ら商売もして、それから省線を利用して蠣殻町へ出かけて行く。そこで例の事をやつたり、またさる伝手から商売の外食券を仕入れたりする。おじさんは道を歩きながらも、しょっちゅう落ちて いる 煙草の吸いさしに注意して、携帶している頭陀袋の中に拾い込む。一日でかなりの収穫がある。三時頃家に帰ってきて、拾い集めてきた吸いさしを材料にして、巻煙草の製造をする。そして出来たやつを、

これも道で拾つた空箱に詰めて、晩飯時になつた食堂へ出かけて行くのである。五時頃から七時過ぎまでいると、かなり商売が繁昌する。おじさんは煙草一箱につき拾円儲け、また外食券一枚につき二円儲けた。煙草は一箱買う人もあり、また三本くれという人もあり、また一本だけ買う人もあつた。おじさんよりは少し年の若い、やはり年寄の人が、「食券二枚に、煙草を一本くれませんか。」と云つてゐるのを見た。その人は食後の一服をすると、おじさんに「おさきへ。」と挨拶して出て行つた。おじさんの生活方法は、これをしも闇と云わなければならぬかも知れないが、私には全く非難の余地がないように見えた。おじさんは日曜日には、蠣殻町の方が休みなので、上野の山まで足をのばして、素人

野球を見物して時間つぶしをしているようであつた。大工さんの家には、努めてただ寝るだけにしているようであつた。あるとき私はこんなおじさんにさえ借錢の申込みをした。私にはおじさんから不機嫌な顔をされ断られても仕方のない弱身があるので、おじさんは私の申出を容れてくれた。おじさんはかつて私がおじさんを騙したことを、忘れているかのように見えた。私はほつとして随分気持がらくになつた。おじさんが私を赦してくれていることがわかつたから。

おじさんが行つている食堂の客は、殆どが常連で、みんな朝に夕にここに寄つて顔を合わしているのであつた。皆んな素朴な生業のりわいの人ばかりであつた。一日の仕事をすましてここに集り、食

事をして歓談のひとときを過ごして、それからそれぞれ宿へ引き上げているようであつた。一椀の飯に、一杯の汁に、一日の憩いと解放を感じることの出来る人たちであつた。こういう人たちの間におじさんが生活の道を見出していることが、おじさんの人柄にふさわしいように私には思えるのであつた。ここに集る人たちの間では、おじさんが最年長者のようにあつた。

ある日、食堂へ行つたら、おじさんの姿は見えなかつた。食堂のおかみさんに、おじさんがもう帰つたのか、それともまだ来ないのか訊くと、おじさんは昨日この先の病院へ入院したという話であつた。大腸カタル、若しかしたら痙攣えきりかも知れませんよとおかみさんは云つた。どんな具合でしようかと訊くと、なにしろ年

寄ですからねえと云つた。私は病院の所在をおかみさんからきて、すぐ病院へ行つた。おじさんの病室には四つ寝台が置いてあつて、みんな塞つていたが、おじさんのほかは二、三歳の小児ばかりで、それぞれ母親らしい人が附添つていた。おじさんの病気は大腸力タルであつたが、医者は年寄のことだし、万一ということがあるから、身寄の人に来てもらつた方がいいと云つた。身寄はない人ですと私は云つた。おじさんはだいぶ弱つていたが、私には大丈夫だという感じがした。看護婦になにからなにまで、下のものの世話までしてもらつているとおじさんは氣の毒そうに云つた。その後十日ばかりして行つたときには、おじさんはもうかなり元気になつていた。

「きのう看護婦が風呂に入ってくれたよ。さつぱりしたよ。」と
おじさんは嬉しそうに云つた。「情けないもんだね。足腰が立た
ないんだよ。」

「それは体に力がないからだよ。物が食べられるようになれば、
力が出てくるから歩けるようになるよ。」

「看護婦がおれを負つて風呂へ連れていくてくれるんだよ。まる
で娘のように面倒を見てくれるよ。」

それからおじさんはいかにもおじさんらしいことを云つた。

「ねえ、きみ、とても腹がへつてかなわないんだよ。毎日お粥ば
かりなんだ。氷砂糖を買つてきてくれないか。おれはそれをしや
ぶつていようと思うんだ。」

「いまが大事なときじゃないか。辛抱しなよ。」

おじさんが氷砂糖を欲しがるのは、口ぞみしいためばかりではなく、寝台に寝てばかりいて一日が長くて退屈なので、それでもしゃぶつて気を紛らわしたいらしいのだつた。私は看護婦に訊いてみたが、差支えないと云うので、病院の売店から氷砂糖を買ってきて。おじさんは早速それを頬ばつた。病室の附漆のお母さんか誰かが口に入れているのを見て、おじさんは子供のように欲しくなつたのかも知れなかつた。

おじさんの病状は、その後まつたく順調で、日ましによくなつていつた。それでもおじさんは一月あまり入院していた。食堂のおかみさんがいちど見舞いに来てくれたそうである。その後しば

らく私はおじさんに御無沙汰していたが、殆ど一年ぶり位に尋ねたら、おじさんは元気なくしょんぼりしていた。

「きみに愛想を尽かされちゃつたし。」

とおじさんは氣の弱いことを云つた。それは私の方こそ、おじさんに云わなければならない言葉であつた。人が人に愛想を尽かすなどということは、果して出来ることだろうか。若し誰かから愛想を尽かされていい人間がいるとしたなら、それは私のことだろう。

話をきくと、その後おじさんの商売の方は下火になる一方で、食券も煙草も殆ど需要がなくなつたようであつた。それでも食券の方はまだいくらか利用する人もあるようだつたが、煙草の方は

とうに自由販売になつた現在、いまさらしけモクを喫う人はいないに違ひなかつた。蟻殻町の方も、たまにしか行かないようだつた。日傭労務者の登録を受けるには、おじさんは少し年を取り過ぎていた。

「養老院へ行けなんて云う人もいるんだが、気が進まないんだよ。」とおじさんは云つた。「もう少し前だつたら、日傭にもらくなれたんだが、その時分はこつちの商売が繁昌したもんだから、つい登録する氣にもならなかつたんだよ。それにいまいるところも退かなきやならないんだよ。いま、おかみさんが大きなおなかをしていてね、子供が生れるまでにほかに部屋を見つけてくれつて云われているんだ。気の毒なんだよ。随分長い間世話になつた

よ。おれが父親の おやじ ような気がするつて云うんだ。」おじさんは目に見えて困窮していた。私はと云えば、私はまた人から借錢して暮していて、いまだに陽の目を見ない小説を書いている身の上であつた。住居の方もある牛乳屋の二階にお情けで置いてもらつている状態であつた。

その後またしばらくおじさんの許を尋ねなかつた。するとある日、めずらしくおじさんから私のもとに葉書が来た。見ると、就職ならびに転居の知らせであつた。

「目に青葉山ほどときす初かつおの季節に相成りました。元気でご活躍のことと思ひます。その節は一方ならぬご配慮にあずかり忝く存じます。この度当寺院に住込みました。健康も至極良好で

ありますからご安心下さい。おひまの折りに是非一度ご光来下さるようお待ち申します。谷中○○寺内、野辺地礼次郎、追伸、五重塔を目じるしにお出になりその辺にてお尋ねになればすぐわかれります。」

右のような文面であつた。私はまずなにはともあれほつとした。この文面から察すると、新しい環境はおじさんにとって快適なものであるらしく、おじさんはまったく満足しているように見受けられた。この葉書は私に友人の近況をこの目で見届けたい心を起させた。私は早速谷中まで出かけて行つた。省線日暮里駅で下りて、五重塔を目あてにして歩いていき、とある花屋で訊くとすぐわかつた。この辺は関東の大地震の災害をも、また戦災をも免まぬか

れていて、一体の家並はひどく古めかしかつた。○○寺はわりと小体な寺院であつた。門構えも瀟洒で俗でなかつた。私はまずその見かけに一目惚れをした。住職も必ずや奥床しい心根の、清貧に安んずる人に違いないという気がした。

庫裏の入口のわきに、一もとの栗の木があつて、折から花をいつぱいつけていて、その匂いがはげしく鼻を刺戟した。私は案内を乞うた。

「ごめん下さい。ごめん下さい。」

応はない。いらえ奥の方からかすかに琴の音がきこえてきた。

「ごめん下さい。」

琴の音が止んだ。待つ間ほどなく、洋装の娘さんがあらわれた。

「野辺地さんしるべの知辺しるべの者ですが。」

「あ、おじさんですか。おじさんは一寸出かけておりますけど。
おじさんは当寺に於ても、もはやおじさんと呼ばれているよう
であつた。

「それでは後ほどまたお伺いします。」

「いいえ、すぐに戻つて参りますから、よろしかつたら、お待ち
になつて下さい。」

「それでは待たさせていただきます。」

私がそこの式台のはしに腰をかけようとしたら、娘さんは、
「あの、こちらでお待ち下さい。」

と云いつつ、下駄を突っかけて庫裏の外に出た。私は娘さんの

後に従つた。庫裏の横手に物置小屋のような軒の低い小家があつて、娘さんはその軒下をくぐりながら、私をかえりみて、

「どうぞ、こちらでお待ちになつて下さい。」

とくりかえした。小家の内部は六坪ほどで、座敷と土間とから成つていた。座敷の畳数は四畳半で、格子のある窓際に小机が据えてあり、小机の下には座布団があつた。壁には見覚えのあるおじさんの襯衣やズボンがかかっていた。察するところ、おじさんはここで寝起きしているのだろう。娘さんは座布団を取つて私はすすめ、

「どうぞ、おらくになさつて下さい。」と云うと、立ち去つた。

私は上框に腰かけたが、さて手持無沙汰であつた。こんなとき、

煙草のみならば懷中から煙草を取り出して一服するわけなのだろう。土間の片隅には鍬やシャベルや炭俵や七輪や手桶などが置いてあつた。羽目板にはよきほどのところに棚が打ちつけてあつて、棚の上には炊事道具その他が置いてあつた。この棚は最近そこに設けられた形跡が見える。けだしおじさんの細工になるものだろう。

私は座敷に上り机の前に坐つてみた。机の上には硯箱が置いてある。硯箱を持ち上げてみると、千字文と半紙の束があつた。半紙には手習いの跡がある。手習いなんかはじめたところを見ると、よくは様子はわからないが、おじさんはだいぶ閑日月を楽しんでいるらしい。私はいつそ羨ましい気がした。窓からは涼しいほど

の風が吹いてくる。窓の向うには初夏の光を浴びた木立も涼しげな、この寺の墓地が見える。私は小家を出て墓地の中を歩いた。私がおじさんのために墓誌銘を考案したのは、この散策の最中に於いてである。私が頭の中でどうやら墓誌銘を仕上げたとき、風に送られてまた琴の音がきこえてきた。つづいて歌声もきこえてきた。

いとしのこがらがさ
きょうもとおれかし
やさしのこがらがさ
きょうもとおれかし

私はきき惚れた。私がまた小家に戻つて、所在なさに机に向い手習いをはじめていると、娘さんがお茶を持つてきてくれた。

「どうも、お待たせしてすみません。妹が今年からこの先の幼稚園にあがりまして、それでおじさんに送り迎えをしてもらつているんです。もう戻ると思います。」

「おじさんはいつからこちらに御世話になつてあるんですか。」「まだ一月ほどですわ。」

「僕はおじさんからまだなにもきいていないんですが、どういう御縁からですか。」

「私共で前から仕事を頼んでいる大工さんからおじさんの話をき

きまして、ちょうど私共でも人手が欲しかったもんですから。」

「おじさん体はどうですか。葉書には元気なように書いてあります
したが。おじさんはお役に立ちますか。」

「ええ。よく働いてくれますわ。父も喜んでおりますわ。それに
父は碁が好きなもんですから、おじさんが来てからいい相手が出来たつて、それは喜んでおりますのよ。」

「それはよかつたなあ。」

「それにおじさんはいい人ですわ。妹もよく懐いていますのよ。
「さつき琴を弾いていたのはあなたですか。」

「ええ。」

「あの曲は古いものですか。」

「いいえ。曲は古いものではありません。室町小唄に私の琴の先生が節づけしたもののです。」

「いいですね。」

「ええ。私も好きなもんですから。」

そこへおじさんが女の子を連れて帰つてきた。色白な澄んだ目をした可愛い子だつた。姉さんによく似ていた。

その日おじさんからきいた話によると、この寺の家族は住職と娘二人だけで、母親は去年亡くなり、十九になる姉娘が主婦の代りを勤めているということであつた。「養子になる気はないかね。」とおじさんは冗談を云つた。私はまだ住職の顔は知らない。

(「新潮」昭和二八年七月号)

青空文庫情報

底本：「日々の麺麭・風貌 小山清作品集」講談社文芸文庫、講談社

2005（平成17）年11月10日第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日増補新装版第1刷発行

初出：「新潮 第五十卷七号」新潮社

1953（昭和28）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://wwwaozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

おじさんの話

小山清

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>